

ポスター報告 17

欧陽 珊珊 立命館大学先端総合学術研究科

#報告題目 「障害のある性的少数者」の創造的な生き方と運動の理念形成——当事者の生活史から

#報告キーワード 障害のある性的マイノリティ 交差性 社会運動

#報告要旨

1. はじめに

障害者の性が問題にされるとき、かつては、そして現在でも、そこに異性愛的な枠組みの強制が働き（花田 2001）、性的少数者に対しては健常者の枠組みの強制が働く場合が多い。このような強制的健常者主義（compulsory able-bodiedness）と強制的異性愛主義（compulsory heterosexuality）の規範によって構築された社会（McRuer 2006）から「障害者」と「性的少数者」というスティグマを同時に付与された「障害のある性的少数者」はダブルマイノリティな存在である。先行研究において、マイノリティ集団の内部のさらなるマイノリティの問題は、多重的否定（Collin 1990）、複合的差別（上野 1996）として捉えられてきた。一方、アジアにおいては近年、台湾が性的マイノリティの権利擁護に最も進んでいる国と言われている（Martel, 2016）。台湾における性的マイノリティ運動と障害者運動の中に、障害のある性的少数者が活躍している姿も見られる。

そこで本研究の目的では、台湾における「障害のある性的少数者」運動のリーダーである V さんの生活史の一部を取り上げ、障害と性的マイノリティの交差性を持つことにより、V さん自身がその交差性を肯定的にとらえているのではないかという側面を明らかにし、そして運動の理念形成に交差性がどんな影響を与えたのかについて考察する。

2. 対象と方法

本報告では、台北に拠点をおく障害のある性的少数者の当事者団体である「残酷児」と障害者向けの性介助サービスを提供するボランティア活動団体である「手天使」のリーダーのひとりである V さんに注目する。報告者は 2019 年に台北に V さんを訪問し、インタビューをおこなった。50 代の V さんは、カンボジアに生まれ、2 歳に急性灰白髄炎（ポリオ）を疾患し下肢の機能がすべて喪失した。家族と台湾に移民した後、小学校 5 年生から高校ま

で障害者施設で生活した。29歳の時、性的指向は同性であることを自認してから、Vさんは激しいゲイの文化を体験しつつ、その過程でアイデンティティ変容していった。Vさんは1995年頃から現在まで、障害のある性的少数者として台湾のマイノリティ社会運動に積極的に参加してきた。

3. 結果と考察

Vさんは現在自立生活を行っている。Vさんの聞き取り調査から、親族から結婚・子供を持つことを反対されたことで、かえって家族だけでなく社会に性的指向をカミングアウトしやすかったという経験や、障害のある身体を肯定したことで自らの性的指向も同時に肯定できたという経験、また非異性愛者であることで障害者にとって性的自由を獲得したという経験など、ダブルマイノリティの交差性から自身の生き方を肯定することになり、創造的な活動につなげていったことが明らかになった。

また、Vさんは差別と排除の経験をきっかけにして、性的マイノリティ運動だけではなく、障害者運動にも参加する必要性を感じるようになったことも明らかにした。障害のある性的少数者は自らの権利、性（性的指向とジェンダー・アイデンティティ）を追及していくしかないという社会運動の理念をVさんが形成した。

[倫理的配慮]

本報告の調査は、「立命館大学における人を対象とする研究倫理指針」に則って、立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承諾を得て実施した（倫理審査番号：衣笠一人-2018-72）。

[文献]

Collins, Patricia Hill, 1990, *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*. Unwin Hyman.

花田実, 2001, 「セクシュアル・マイノリティ——特に障害を持つゲイから見た社会」障害学研究会関東部会第18回研究会報告.

Martel, Frédéric, 2013, *Global gay: comment la révolution gay change le monde*, DOCUMENTSSC.HU. (=2016, 林はる芽訳『現地レポート世界LGBT事情——変わりつつある人権と文化の地政学』岩波書店.)

McRuer, Robert. (2006). *Crip Theory: Cultural Signs of Queerness and Disability*. NYU Press.

上野千鶴子, 1996, 「複合差別論」井上俊他編『差別と共生の社会学』岩波書店.

[謝辞]

本報告の調査は、2018年度立命館大学生存学研究所・若手研究者研究力強化型「国際的研

究活動」研究費の支援を受けて実施した。